

佐佐木幸綱歌集『春のテオドル』

本田一弘

テオが問い直すもの

春のテオドル。何と明るい響きのタイトルではないか。「る」という音が重なり、口に出すと愉しくなる。歌は意味だけではない、ということを楽しんでいい。幸綱は表記の面で新たな取り組みを試みている。全体にわたって、一首中の漢字を減らしてひらがなを多く使っている。意味の理解を急いでしまう読みのスピードにブレーキをかけるような表記をイメージしたという。現在の歌壇を代表する歌人でありながら、常に表現のあり方を追究し、挑戦する。

集中、何ととっても愛犬テオドル（白いゴールデン・レトリバーの雄。二〇一五年三月二十九日生まれ。体重三十六キロ。）を屈託なくうたった作品がいい。
・つぼみふめる梅の木のした あらわれ
て正月のテオかがやきにけり

・かぜをかぐつちふかくほる 昨日から
オには春がきているらしい
・空中にテオの四肢のびる 川すながかぜ
にふかれてめくれゆくなか
・ほえられていきりたちあがりほえかえす
テオよ犬歯のましろきわかさ

・かいだんは人間のためのものなればテオ
はさかだちのかたちでくだる
正月に蕾が膨らむ梅の木の下、テオのか
らだが輝いている。風の匂いを嗅ぎ、土を
深く掘り返し、からだ全体で春を感じ取
る。川砂がめくれるほど強く風の吹く中、
四肢を伸ばし空中を跳ぶテオ。他の犬に吠
えられて怒りが立ち上がり、犬歯をむき出
しにして吠え返すテオ。「階段」は人間の
ためのものであって、テオにとっては何の
意味もない。いのちの原点ともいえるべき
身体が縦横無尽にうたわれているのだ。

季節のめぐりの中で、自然とやわらかく交
感し、世界と真正面から向き合うテオの身
体は輝いている。幸綱のここるところからだも
テオの身体と一緒に喜んでるよう
だ。これらのテオの歌からひらがな表記が

効果的だということを実感する。仮に二首
目を「風を嗅ぐ土深く掘る 昨日からテオ
には春が来ているらしい」と表記したら、
意味が強すぎてテオの躍動感や春の季節の
やわらかさが損なわれてしまうだろう。
・きえてしまったことばよ いまはもうだ
れも「拳闘」とよぶひとなしざびし

私たちから消えてしまったのは「から
だ」ばかりではない。「ことば」も消えて
しまったのだと幸綱はうたう。今ではもう
みな「ボクシング」という外来語を使って
「拳闘」と呼ぶ人など誰もいなくなつてし
まったなあ。幸綱のさびしむ声がかきこえ
くる。「ひとなし」「さびし」、「し」とい
うさびしい音が豊みかけてくる。第一歌集『群
黎』で「男歌」の歌人として短歌史に鮮や
かに登場した歌人がつづやく「さびし」と
いう語が心底胸にしみてくる。タイトルの
響きが明るく、集全体でテオの躍動する身
体が詠まれているからなおさらである。

文明を手にし、社会化された人間は自然
と交感する身体を喪つてしまった。この歌
集は、幸綱がテオの身体を通じて、現代社
会が喪つてしまった「からだ」と「ことば」
の問題をやわらかく問い直す歌集なのだ。